津久井やまゆり園の再生に向けて
～意思決定支援の取り組みから学ぶもの～

津久井やまゆり園　芹が谷園舎
深瀬 恒　　石井 雄祐
伊藤 輝大　　須藤 祐一
押田 誠一郎

1.プロローグ

津久井やまゆり園事件が起こってから2年数ヵ月の月日が流れた。現在、津久井やまゆり園は除却工事が進んでいる。神奈川県が策定した「津久井やまゆり園再生基本構想」には、元の場所と仮移転先である横浜市港南区の2つの地域に施設を建設するという計画が謳われている。今回、津久井やまゆり園の再生に向けた取り組みとして、基本構想の柱の一つになっている「意思決定支援」の取り組み状況について報告する。

2.はじめに
～津久井やまゆり園再生基本構想とは～

「津久井やまゆり園再生基本構想」における基本的な考え方として、「津久井やまゆり園利用者の今後の生活の場について、利用者の選択の幅を広げ、かつ、その意思を可能な限り反映できるよう複数の選択肢を用意し、入所施設においても、また、地域での居住の場においても、一人ひとりがその人らしく暮らすことができる環境を提供することが必要である。」とされており、「利用者の意思決定支援」「利用者が安心して安全に生活できる場の確保」「利用者の地域生活移行の促進」を3つの柱としている。

特に、利用者の意思決定支援については、「今後の生活の場の選択については、津久井やまゆり園利用者一人ひとりの意思を尊重すべきであり、その実現に向け、丁寧に、かつ適切な手続きにより、利用者の意思決定支援に取り組む。」とされている。平成 33 年度(2021 年度)以降の移転が決まっており、居住の場を選択しなければならないことはもちろんではあるが、この意思決定支援を通して、利用者一人一人が望む生活を実現していき、その一人一人がその人らしく生きていきながら、それぞれの幸福が創造できるよう、私たちは支援をしている。

3.生活の中での取り組み
～利用者自治会(ピザの会)～

当園再生基本構想に基づく取り組みのうち、利用者の生活の中での取り組みとして、当園利用者自治会(ピザの会)での当委員会での取り組みについて報告する。利用者自治会(ピザの会)については、芹が谷園舎への仮移転後すぐに再開し、食べたいものややりたいこと等、利用者一人ひとりの意見、要望を取り入れて支援にあたれるように配慮した。

ピザの会というユニークなネーミングだが、利用者の発案である。その由来は、みんなでピザを作って食べよう、という企画を実施したことにある。

ピザの会は年度の最初に選出された会長、副会長といった役員の方々を中心に運営され、あおぞら委員がそのお手伝いをしている。主体はあくまでも利用者である。主な活動内容は、利用者から要望を募り、寄せられた要望を実現させる企画の実施やコーディネートである。ピザの会に参加することが難しい利用者の要望は、各寮の利用者自治会を通じて吸い上げるようにしている。

かつては利用者の要望に応え、千木良のやまゆり園正面玄関にアイスの自販機を設置した。「喫茶店をやりたい」という要望には園祭でカフェを出店し、利用者に売り子をしてもらった。本年度は「ボウリングがやりたい」との要望を受け、ミニボウリング大会を開催した。使用するピンは、利用者がペットボトルを加工して作成した。元気な方にも、身体が不自由な方にも楽しんでもらい、大盛況であった。一人でも多くの利用者に参加してもらえるようかき氷も用意し、食べる楽しみも併せて提供した。「花を植えたい」という利用者には、園芸が得

意なボランティアとの活動を用意した。

ピザの会では多くの要望をあげてもらい、毎回とても盛り上がっている。役員をはじめ参加される利用者はみないきいきと活動し、寮内ではなかなか見られない姿が見られる。ピザの会が利用者の持つ力を発揮できる場になっていると思われる。個別の要望へのきめ細かな対応や待たせないタイムリーな対応、どうしても言葉で話せる利用者が中心の活動となってしまいがちなため、バーバルコミュニケーションではない方の要望をいかに汲み取っていくかは今後の課題であるが、各寮の利用者自治会と連携しながら利用者一人一人の要望に応えられるよう努めていきたいと考えている。

ピザの会の場を借りて、再生基本構想や意思決定支援についての説明も行っている。利用者一人一人が今後どこに住み、どのような暮らしを望んでいるのか。その一人一人の声を聴き、思いを汲み取りながら、関係者間で協議し、その人らしい暮らしの実現を目指すことを、丁寧に、回数を重ねて説明してきた。スライドを用いて画像やイラスト、文字による視覚情報を駆使し、なるべくわかりやすく伝えられるように配慮した。刺激に敏感な利用者については、寮を訪問し、個別に説明をした。

利用者一人一人が芹が谷園舎での暮らしに慣れてきたであろう平成 29 年9月、ピザの会において再生基本構想の説明会を開催した。この時の様子だが、最初に千木良のやまゆり園の動画を再生したところ、「あっ！　やまゆり園だ」などと以前の生活を懐かしむ声が聞かれた。続いて入倉園長より、芹が谷園舎への移転の経緯や千木良のやまゆり園と芹が谷園舎との位置関係を、神奈川県の地図上で示して説明した。「みんなバラバラになっちゃうの？」という不透明な状況への不安視される発言が聞かれた。そのことで先の見通しを示すことが、利用者への重要な配慮であることが分かった。その後、4つのグループに分かれて意見交換を実施し、「芹が谷がいい」「津久井がいい」「グループホームもいい」「みんなと一緒がいい」「友達と一緒のところがいい」等と様々な意見が聞かれた。

平成 30 年 11 月2日のピザの会でも、意思決定支援担当職員と神奈川県共生社会推進課職員より、意思決定支援及び施設整備状況についての説明を実施した。文字は専ら平仮名を用い、短い文になるよう努めた。施設が建て替えられることを、建物の写真に×印をつけて表現、また転居することを、引っ越し業者のイラストで表現した。新しい施設が小規模で、個室になることを、顔のイラストで比較できるようにして表現した。新しい施設がいつ完成するのかを、「お花見を3回やったら」と表現した。千木良のやまゆり園の写真がスライドで表示されると、「やまゆり園だ！」「中庭だ！」などと多くの方が反応を示された。利用者一人一人が千木良のやまゆり園のことをよく覚えているということが分かった。

1回の説明で、転居のことや意思決定支援について理解をしてもらえるとは考えていない。時間をかけ、説明の仕方を工夫しながら、今後もていねいな説明を続けていきたいと考えている。また利用者一人一人の気持ちを大切にし、合理的配慮をしながら今後も進めていこうと考えている。

4.基本的な流れ
～津久井やまゆり園再生基本構想に基づく津久井やまゆり園利用者の意思決定支援の基本的な流れ～

図　津久井やまゆり園再生基本構想に基づく意思決定支援の流れ

上の図は、家族会にて、家族に津久井やまゆり園再生基本構想に基づく意思決定支援の流れについて説明した時の資料である。この図に示しているように、基本的な流れは、

(1)事前の準備
(2)聞き取り
(3)担当者会議
(4)支援の実施
(5)意思決定支援検討会議

(6)意思の確認
である。担当者会議で出た課題等について支援を実施し、それを基に、更に担当者会議で協議をし、更に支援を行うという繰り返しのサイクルで支援を実施している。

5.意思決定支援の事例
～S 様との歩み～

ここからは、現在、取り組みを進めているＳ様の意思決定支援について事例を報告する。
まずは、表現やコミュニケーション、関わりについての概要を中心に報告する。

(1)S 様の概要
48 歳、男性、知的障害、障害程度 A1、支援区分6である。本人の表現は、楽しい、嬉しい等の快の時は声を出して笑う等、表情豊かに表現する。また、嫌や不安、思うようにいかない等の不快時の表現は、激しい自傷、他傷行為、物品の破壊等が見られる。

①コミュニケーションの特徴
伝えたいことを独自のジェスチャーで表現することが多い。理解については、日常生活の中の簡単な事柄であれば言葉で可能である。また、時として視覚情報の補足により、より一層の理解に繋げることができる。

②他者との関わり
他者との関わりがとても好きな方である。その反面、本人の「関わりたい気持ち」が、過去の経験等により上手に表現できず、結果として配慮行動が先行することが多い。また、一度配慮行動が先行すると、それら負の関りから抜け出すことが難しいという特徴もある。

「ジェスチャーが得意」「快、不快の表現が汲み取りやすい」「人との関りが好き」な S 様の意思決定支援を実際にどのように進めてきたのか。

(2)チームで支えるための準備
S 様の再生基本構想に基づく意思決定支援についても、まずは「S 様を知るための情報整理」「チームで支えるための情報共有、役割分担」を初めに行った。これらの作業を各関係者やチームで行うことで、S 様を今まで以上に知ったうえで、取り組みを行うための準備を進めていった。
また、準備を進める中で多角的な意見交換を行い不足情報や新たな見立て、それらを収集、実行するための役割分担等を決めていった。これらの作業により、チームとして共通した方向性を持ち、この取り組みを進められるようにした。

主に情報整理、チーム共有、意見交換、役割分担等を行ったものは下の表の通りである。

関係者各々の整理		チーム会議
・基本情報 ・生活環境 ・家族関係 ・社会関係図 ・ADL など	⇒	・情報共有 ・意見交換 ・不足情報 ・見立て ・取り組み ・役割分担

表　チームで支えるための準備

これらの情報を相談支援専門員が集約し、チームで意思決定支援を行ううえでの手掛かりや根拠を明確化し、意思決定を支えるための準備を進めていった。
S 様についての詳細な取り組み内容の中から実際の取り組みを行っている事柄の一部とそれらを通じた職員や S 様の変化について紹介する。

(2)共有・意見交換・役割分担を行った事柄⑴
S 様は現在、過去に比べてとても穏やかな様子が伺える。このことは、行動等をチームで共有していても明らかであった。しかし、チームで意見交換を行うと、「穏やかになった要因は何なのか？」このことについて、個々の見解はあるものの、実際には不明瞭な点が多くあることが判明した。そこで、この事柄について意見交換を重ねていくと、チームとして本人の望む生活を一緒に考えていくためには、「穏やかな事実」以上に「穏やかになった要因、背景」を知ることが重要であるとの考えに至った。そこで、相談支援専門員が中心となり「家族」「過去の支援者」からのヒアリング、過去の資料の読み直しやポイントをあてた情報集約、それらを表にまとめ見える化し、本人の情緒と要因、背景をまとめ、「穏やかな本人」のために大切なもの

を探る手掛かりや推測する根拠を明確化していった。実際にまとめた表は、以下の通りである。

	激動期（入院前）	入院期～落ち着き	再激動期	芹が谷期
ご本人	人との関わりは好きで賞賛や特別感には喜びを感じる。しかし情緒は安定せず些細なこと（物品要求等）をきっかけに唾吐きや他者を引っ掻く・叩く、蹴る等の他傷行為。自身を引っ掻く等の自傷行為が頻回。ご本人の思いが通らないことへのストレス耐性が非常に弱く、些細なことがきっかけで不安定となり配慮行動に至ることもある。 ご本人の伝えたい内容が伝わらないことでの不調もあり。伝わっても叶わない場合でも同様。 飲食やドライブ・買い物等余暇的な活動は好む。 日中活動への参加を行うが、「お菓子が欲しい」の気持ちが大きいお菓子や飲み物が待てないことや多く欲しいこと等で配慮行動へ至ることも多々あり。	長期入院についてご本人の特性や園での様子を考えると難しさを感じる中での実施。 予想以上に穏やかな入院生活を送ることが出来る。（体調不良・精神面の安定・環境変化・・・要因不明）	不穏な様子や行動強く見られる。 車椅子で他者に突っ込んでいく。叩く。自傷行為等頻回。	引っ越し後、職員や他利用者様を覚えている様子。 ジュース購入の希望や眠気等でイライラする様子はあるが他者と環境的に離れる必要性まではない。 誤嚥性肺炎にて入院後、退院すると更なる落ち着きが見られる。 日中活動は作業を通じた賞賛や関り自体が楽しみ。お菓子は今は目的ではない。
環境	自分の所属している寮としての意識はある。 構造的な環境について現状と大きくは変わらない。（共有のリビングや廊下・浴室等あり）	2013/3/26 イレウスで長期入院 大学病院　一般的な病棟 病院と施設の違い（入院をしていること）は理解。	事件で受傷。その後病院を転々とする。退院前最後に入院していた病院では情緒不安定あり行動も落ち着かない。四肢拘束。ヘルパーへも攻撃。病院生活=穏やか（×） 知らない環境。 自他への怪我や情緒に配慮し他者のいない共有スペースで過ごす。	共有スペースのリビングで過ごすこと多い。 ジュース購入等で落ち着かないことがあったが、以前程ではない。ご本人と提供日を整理する等の対応で落ち着く。
対人	ご本人の欲求に関する関りから情緒不安定となることしばしばあり。関り自体は求めるが配慮行動を通じた関りが先行していた。担当職員の前では配慮行動なく過ごしていたが、対象者がいない場面（いなくなった後含む）では反動的に配慮行動が拡大することもあった。 ご本人の希望が満たされたときは機嫌よく過ごすが、長く続かず次の希望や配慮行動のきっかけが表出する。 ジェスチャーでのコミュニケーションは概ね可能ではあったが、通じない不安定よりも叶わない不安定が多い。	入院中、身体が動くようになるとご自身で車椅子を操作しナースステーションへ行って過ごしている。 母が毎日のように面会へ来ていたとのこと。 医療処置も含め看護師との関わりもあり。ナースステーションで絵を描く等もあった。 看護師や医師は元々は知らない人。	知らない職員・利用者様。 利用者様もS様より軽度の方多くご本人としても居心地の悪さを感じている様子。 （母談）居場所が見つけられず関わる手段が再び悪いことだった。	知っている職員・利用者様。 寮編成の都合で知らない利用者様がいた。先制的に攻撃を行うが反撃を受けて、その後は友好的に過ごそうとしている。
その他	情緒不安定なことが多く、ご本人の思いが通らない場合は他傷行為や自傷行為が見られる。これら行動へと繋がる思いの発信・主張も多く見られたため結果としては頻度も強度も大きい状況にあった。	（母談）毎日母が病院へ行っていた。そのことで母親からの愛情・関りが満たされたのだと思う。また、看護師の方にも優しくされ楽しい・嬉しい関りが自然と行えていた。動けるようになった時は車椅子を自身でこいで看護師のところへ行きお絵かきも行っていた。悪いことをしないでも関われる経験満たされる経験をしたことが本人の落ち着きに繋がったのかなと思う。	津久井やまゆり園の職員が面会へ行くと帰れると思いリュックを自分で用意をし荷作りをする。また、職員のカバンへ私物を入れようとするとも見られた。	受容的な対応が増えた。 自傷の傷はほとんど目立たないほど。 日中活動にも意欲的に参加。（お菓子なし） 褒められることが嬉しい。 ジュース購入についてはカードで提示
支援ヒント	人と関わりたいが上手く関われない。→欲求や配慮行動が他者との関り。関わるための配慮行動。 ※成育過程での学習か。 コミュニケーションが円滑なことはいことではあるが、円滑だから安定しているわけではない。（伝わっても納得いかない） 褒められることや特別感は嬉しい。他者は好き。	体力的にも弱っていた時期に配慮行動以外を通じた他者との関りが行えた。母や看護師との配慮行動以外を通じた関りの蓄積により新たな人との関わり方見つけられた。 負の循環から良い循環へ。 負：関わり→配慮行動・要求→情緒不安 良：関わり→良い関り→安定	自分の所属場所としての意識は「津久井」にあった。 知らない人ばかりで居心地は悪い。 新たな人間関係・関わりの構築が難しく負の循環が生まれる。一度そのようになると持ち直しが難しい傾向。 イレウス入院から退院後の様子は病気や服薬等の影響ではなかった。対人や環境により左右される。	知っている人はいるが、知らない人がいること。また知らない場所であることへの戸惑いはある。 場所よりも人の方が重要な様子。 良い関りの循環が行えると、生活の幅も広がっていく。 安定のための余暇→楽しみ拡大のための余暇 安定のためのコミュニケーション→思いの汲み取りのためのコミュニケーション

表 「家族」「過去の支援者」からのヒアリング、過去の資料の読み直しやポイントをあてた情報集約を見える化

上の表を活用し、改めてチームで本人の穏やかな生活の背景、要因を探り、共有していった。本人の情緒を大まかに時期に分け、その時の「ご本人」「環境」「対人」「その他」「支援構築」等を分類分けした。これらを改めて見直し、分析していくことで、本人の穏やかに過ごせる環境や支援、穏やかになった要因や背景を、根拠をもって知っていった。その中から一例を紹介する。

①服薬、加齢のみが要因で穏やかに過ごしているわけではない。

②物理的な環境以上に人的な環境が大きい。何よりも人が大切である。全く分からない人に囲まれることは不安が強い。

③人と関わりたいが故の他傷行為であった。このような負の関り（他傷行為）から始まると、時間をかけて行っても良い関わりへ戻っていくことが難しい傾向がある。

④居場所を感じられる。負の関わりの表出前に、良い関わりが自然と作ることができる環境が重要である。

このような事柄を改めて根拠を持って推測、共有し、S 様の望む生活の手掛かりを探っていった。

このような方法で改めて S 様の現況を見直すと、「今の本人は様々な支援や環境、対人が良い方向に左右している」からこそ維持できていることが共有できた。また、この状態で初めて本人への支援の中心が、配慮行動への対応ではなく、意思表出や意思汲み取りに繋げていけることが分かった。

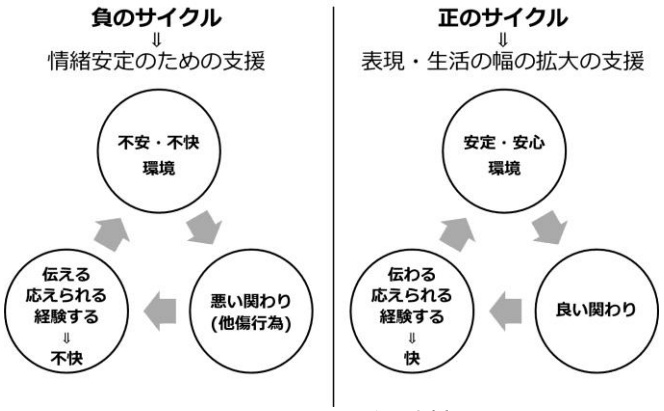


図　サイクルの異なる支援

上の図のように同じ支援であっても「本人の状況」により目的が変わっていく。この目的を「情緒の安定」ではなく、「意思形成、表出、汲み取り」にしていくために、今後も現状のような穏やかな生活の維持、そして、そのための支援が必要であることが根拠を持って明確になった。

このように本人の情緒と要因、背景の整理により、S 様の意思形成、表出、汲み取りを行ううえでの必要な環境が根拠を持って推測できた。また、意思を表現しやすいこれら環境は、S 様の希望する生活環境とも言い換えられと考える。S 様のこれら情緒と要因、背景の整理を通じて、S 様の希望する生活を知る手掛かりが一つ得られた取り組みとなった。

(3) 共有・意見交換・役割分担を行った事柄(2)

先に述べた情緒と要因、背景の整理に加え、

現状の本人だからこそ行える意思表現や理解について共有、意見交換、取り組みについての役割分担を行っていった。「今後の生活をどのようにしたいのか」このことを S 様に決めて頂けたらそれが一番良いと考えている。しかし、現状では全てを決めてもらうことは難しいだろう。それは、私たちの汲み取りの不足も大いに関係がある。しかし、そのような状況の中でも、「少しでも多くのことを自身で決められないのか」「表現できないのか」、そのことを目標に情報整理や共有、意見交換を行った。

概要でも述べた通り、S 様は様々な独自のジェスチャーで思いを伝えることができる。そこで私たちは、本人の思いの発信である、これら意思表出や理解に注目し、改めてジェスチャー表現について、チームとしての状況整理や共有、意見交換を行った。意見交換を行った内容としては、「本人の理解と表現の結びつき」や「ジャスチャー表現に対する支援目的」等についてである。

「本人の理解と表現の結びつき」を改めて見直していくと、本人の理解力は非常に高いことが分かってきた。また、理解力の高さに比べるとジェスチャー表現は少ないのではないかということも分かった。このようなことにより、「本人が理解しているけれど表現に繋げられていない事柄も存在しているのではないか」「表現できる事柄が増えれば、今以上に思いの汲み取りや実現へと繋げていかれるのではないか」という取り組みの方向性をチームとして共有していった。

そこで、これらの事柄を確かめ、本人の更なる表現の拡大や支援者の汲み取りの拡大を目指し、ジェスチャー表現に着目した新たな支援展開を行うことになった。過去に「情緒の安定」という目的で行ってきたジェスチャー表現への理解であるが、これらの取り組みを通じて現状の S 様に対しては、「情緒の安定」以上に「表現の拡大、理解」が大きな目的要素を占めることになった。このことは、先に述べた「本人にとっての穏やかな環境」が整ったからこそ、同じ支援の中に現れた目的変化だと言える。この新たな目的の実現により本人の思いを一つでも知り、実現に近づける。そして、これらの積み重ねにより本人の希望する生活を実現することへ繋げていく。このようなことを目指し、現在は取り組みを進めている。

前述した通り、S 様は「理解の高さや独自のジェスチャー表現」を持っている。私たちはこれらのことに着目し、「ジェスチャー表現の拡大とそれらの汲み取り拡大」を目指し、支援の提供を行っている。

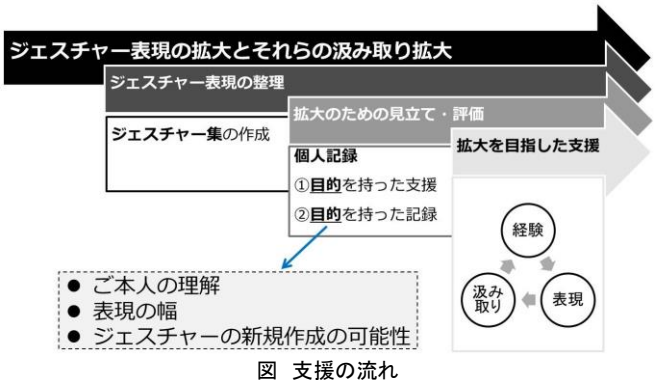


図　支援の流れ

具体的には後述するが、この支援の大きな流れは、「ジェスチャー表現の整理」「拡大のための見立て・評価」「拡大を目指した支援」となっており、これらを支援者間で常に検討を重ねながら、本人と一緒に取り組みを進めている。

それぞれの段階での具体的な取り組み内容について説明する。

(4)ジェスチャー表現の整理

今後の取り組みでは、表現の拡大を目指している。そのためには、まずは現状の表現の把握が必要である。そこで、取り組み開始時点の S 様のジェスチャー表現を見える化をしていった。本人のジェスチャー表現は、職員間の口頭での説明で概ね理解はしていたが、実際にどの程度あるのかは不明瞭であった。そこで、ジェスチャー表現を改めて整理し、見える化をすることで現状の理解と共通のやりとりのツール作りを行った。このツールの作成については、本人に口頭にてジェスチャー表現の意味を確認しながら行った。時には伝えたい事柄が分からず、長時間納得するまでやりとりを行ったこともある。また、過去は行っていたが経験とともに行わなくなったものがあるのか、いつできたものなのか等を確かめるために、現状の支援者以外にも過去に関わりのある支援者や家族等からの情報を収集しながら、ツール作りを進めていった。

このようにしてジェスチャー表現を見える化したことにより、本人の伝えたいことを職員がしっかりと共通して受け止められるようになった。まご、本人も関わる、伝わる楽しみや喜びが増え、より一層

の表現場面が見られるようになった。支援者側は、整理を行うために本人をより一層知ろうとした。そのために関わりの増加や関わり方が変化していった。これらのことが関わりの大好きなＳ様にとって、より良いサイクルで動き始めているのだと言える。

ここで参考として、ジェスチャー集の中から数点を紹介する。

①おやつ(パターン1)

●コーヒーをかき混ぜる真似
●手を上下に動かし「紅茶」
●10 時のオヤツを意味する。

②おやつ(パターン2)

●お菓子を口に持っていく仕草
●3時のオヤツを意味する。
●今日のおやつはどこ?
　ホーム？
　作業棟？

③ふりかけ

●個人購入しているふりかけを使いたい時や残りのふりかけが少ない時に行なうジェスチャー
●指先を擦り合わせ、ふりかけを小袋から出す所を模している。

④海

●手を水平に動かし、平泳ぎの様なジェスチャーです。
●実際に、日中活動でバスに乗り海を見て職員と作り上げたもの。

⑤レッサーパンダ

●日中支援課で野毛山動物園に行き、実際にレッサーパンダを見て、日中支援課の職員と共にジェスチャーを作り上げたもの。

これらジャスチャー表現の整理を行い、表現拡大のための取り組みのベースを作ったうえで、本人のジェスチャー表現拡大のための見立てや評価を行っていくことへと繋げていった。

(5)拡大のための見立てや評価

本人のジェスチャー表現拡大のために必要な要素を見立て、それらを評価する取り組みの具体的な要素としては、「ご本人の理解」「表現の幅」「新規作成の可能性」である。これらの要素についての各々の見立てや評価を行うには、日々の関りや支援、それらについての記録が重要である。事前に共有している共通した支援目標に向けて、目的を持った支援提供と目的を持った記録、そして、それらを一体的に行うことで根拠のある見立てや評価を行っていった。

具体的な取り組みの一部を実際の記録と照らし合わせながら説明する。下の図が、ある日、インフルエンザの予防注射を行った日の記録である。

個人記録①　インフルエンザの予防注射を行う日の記録

ご本人の情緒は落ち着いている状態。職員がご本人へ、「インフルエンザの注射を受けてから、日中活動へ行きましょう。」とお伝えする。（本日2寮では、インフルエンザの予防注射があったため。）すると、ご本人は額に手を当て（ご本人の中では、発熱を表すジェスチャーで以前より使っている。）た後、口元に手を当て咳をする動作をしている。（ご本人の中では、風邪を表すジェスチャーで以前より使っている。）その後、左指を右腕に刺している。（恐らく注射を表すジェスチャーでご本人自身での表現。）職員がそのジェスチャーを見た後、「風邪（インフルエンザ）にかからないように注射すると言う意味ですか。」とご本人へ伺うと「うん。うん。うん。」と3回頷く。注射=風邪（インフルエンザ）の予防のためといった認識はある様子が伺えた。以降は、そのジェスチャーが伝わったのが嬉しいのか表情良く過ごされている。

図　個人記録①

実際の支援風景については、記録からイメージしてもらいたい。このような Ｓ 様とのやり取りや記録の蓄積を日常的に行っている。また、この支援は、当然、担当職員が個人的に行うのでは効果を得

られない。特定の職員が関わるだけではなく、複数職員に本人に対して同様の目的を持ってもらい、本人のジェスチャー表現が特定の支援者に対してのものだけなのか、本人が統一して使っているジェスチャー表現なのかについても確認し、記録として残していった。

こうした記録を書く際に工夫したことをまとめる。

①振り返りを意識し、それぞれの事象についての前後の記録も残すようにした。また、点ではなく、線として繋がる記録を意識した。
②事象の記録に加え、根拠をもととした考察も必要となるときがあった。偏った視点ではなく、今までのことを根拠とした考察を入れて書くように努めた。
③誰が読んでも分かりやすい（事象をイメージしやすいように）記録を書くように意識した。
④統一した目的を持てるように個々に応じてどのようなデータが重点的に必要かを共有するようにした。具体的には利用者別の重点事項を寮内ホワイトボードや紙ベースの表へ落とすことで、意識して支援に当たれるよう努めた。当たり前ではあるが、支援が変わらなければ記録も変わらない。
⑤文字での記録に加え、可能な範囲で事象が起きているときの写真を撮り、その時の様子が多くの職員間で共有できるような工夫をした。
⑥工夫して書かれた記録がしっかりと個別支援計画・評価と一連の繋がりを持ったものとなるよう意識して取り組んだ。

このように工夫をして記録を書いているが、課題も感じている。

①他の業務との兼ね合いでリアルタイムに記録を残す時間はあまりない。そのため、後で入力しようとした際、忘れたり、書洩らしたりすることがある。
②記録への記載の考察において、本当にこの考察で良いか等と悩むときがある。
③詳細な記録として残すため、単純に記録の量が多くなる。記録の時間が足りない。

また、記録以外の課題も感じている。

①手厚く利用者一人一人を大切にチーム会議、意思決定支援会議を行っているが、その反面、多くの職員と労力を必要とし、他が手薄になることがある。
②丁寧に関わりたいが、集団がゆえに利用者個人との関わりの時間を作ることが難しい。
③担当職員別で情報発信をしっかり行わないと、意思決定支援における課題が共有しにくい。
④職員によって思いやモチベーションが異なる。

これら課題感については、継続した改善策の模索が必要であると考えている。

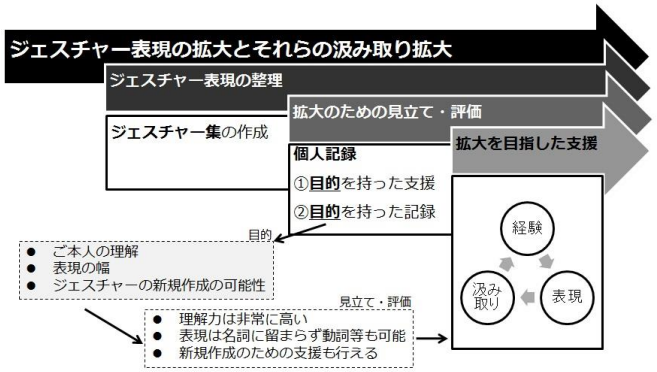


図　支援の流れ

前述したような工夫をしながら蓄積した取り組みや記録をもとに、改めてＳ様の「ご本人の理解」「表現の幅」「新規作成の可能性」について評価した。記録からも分かるように、「理解は非常に高い」「表現は名詞にとどまらず動詞等も可能」「新規作成のための支援も行える」という評価となった。

（6）拡大を目指した支援

これら根拠を持った見立てや評価を行い、更なる表現の拡大を目指した実際の支援提供を進めていった。

実際の支援のポイントとしては、「本人の経験と表現、支援者の汲み取り」を一連として結び付けることである。事前に経験することを説明、表現方法もその都度職員と構築し、それらを本人と職員の共有したツールとしていくことで、表現と汲み取りを行えるジェスチャーを一緒に増やしていくことを目標に行っている。このような目標達成のため、現状は本人の「好きなこと」「楽しみとなること」「得意なこと」を中心にジェスチャー表現の構築を一緒に行った。目に見える好きなこと等を中心としたジェスチャー表現の構築作業により、負担なくジ

ェスチャー表現を一緒に作る経験をしてもらい、また、このような支援者の支援の意図を、実体験を通じて楽しみながら本人に知ってもらっている。もともと関わりの好きな S 様についてはジェスチャー表現の作成作業自体がとても楽しい時間となっている様子である。

そのようなジェスチャー表現の作成作業における支援提供記録を紹介する。

他施設での花火大会のポスターを見てのやり取りの記録、そして、その後の記録が下の図である。

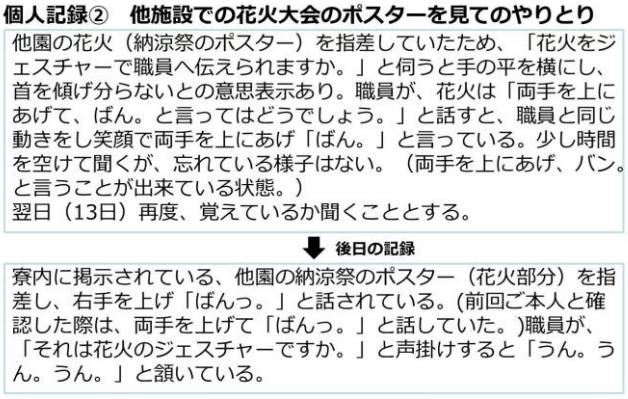


図　個人記録②

当初、職員と確認していた両手ではなかったが、本人自身でしっかりとジェスチャー表現を作り上げることができていた。担当職員ではない別の職員が同様のことを本人へ確認すると、同じようなジェスチャー表現で花火を表現しており、ジェスチャー表現の拡大に繋がった事例である。

現状では、このような支援や記録の積み重ねを行っている。本人が「ジェスチャー表現を作ることの理解」「作ることが楽しみになる」「楽しい経験を通じて作り上げる」段階である。

この取り組みを本人と一緒に進めながら一つでも多くの「経験」と「表現」「汲み取り」を結び付けていくことを進めている。そのために、楽しい、嬉しい経験を多く持てるよう余暇時間の拡大も図っている。

(7)まとめ①　職員の変化

ここまで S 様の実際の取り組みを紹介してきたが、S 様の取り組みを通じて職員や S 様の変化を述べたい。

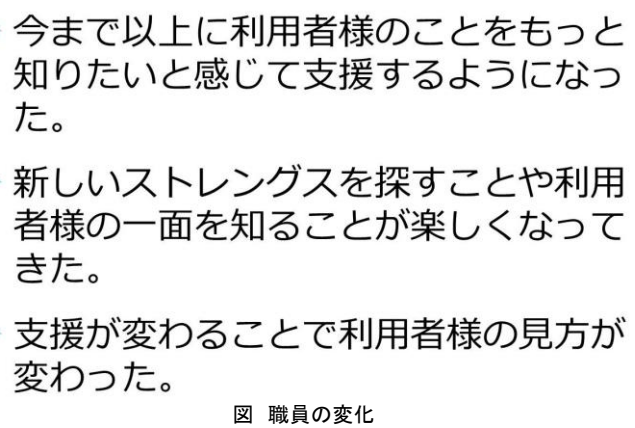


図　職員の変化

現在、私たちは、今まで以上に利用者のことをもっと知りたいと感じて支援するようになった。先程述べた記録等の実務の変化に加え、新しいストレングスを探すことや利用者の一面を知ることが楽しくなってきた。利用者を改めて知り、一人ひとりの伝えたい思いを汲み取ろうとする支援（文字や写真等）といった日々の支援において、一人ひとりの表現や理解に応じた発信や受け止め、どのようにしたら伝わるか、伝えられるか、伝えたいことを増やせるかを考えることが、今まで以上に増えた。そして、支援が変わることで利用者の見方が変わってきた。「理解」「表現」「汲み取り」とそれらを実現に向けた支援といった、これら繋がりのある取り組みにやりがいや喜びを感じることも多くあった。

しかし、今改めて思うと、これらのこと全てが再生基本構想に基づく意思決定支援を行ったから生まれたことでは決してない。今まで行っていた支援を改めて見直したり、ほんの少しの要素を加えたりしたことで広がりが見られていることがほとんどであると感じている。

(8)まとめ②　本人の変化

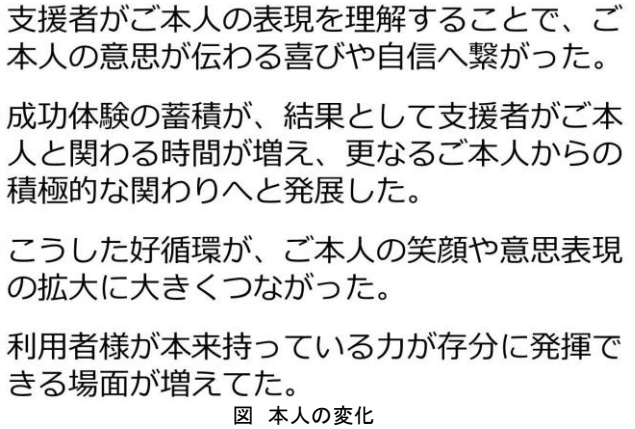


図　本人の変化

私たち支援者が本人の表現を理解することで、利用者は伝わる喜びを感じ、本人の自信へと繋がっていく。これら成功体験の蓄積が、結果として本人と関わる時間の増加や本人の意思表出の拡大に繋がっていった。これらの支援者と利用者の良い支援の循環が、本人の笑顔や意思表現の拡大に大きくつながっていった。

そして、これらの変化は、利用者自身が変わっていったという表現よりも、利用者が本来持っている力が存分に発揮できる場面が増えていったという表現の方が正しいようにも感じる。

ここまで様々な変化を述べてきたが、何よりも取り組みを通じて、利用者の喜びや笑顔や安心が今まで以上に増えていることが一番だと感じている。

6.私たちが目指すもの

ここまで、津久井やまゆり園の再生に向けた取り組みの一端を紹介してきた。

現在、津久井やまゆり園利用者のほぼ全員に対して、この取り組みを開始し、事例にもあげたように、個々において具体的に進めている。もちろん、個々の利用者によって進捗状況は異なるし、時間もかかり、また、知恵と工夫が必要となる。そして、何よりチーム力が求められている。関わる私たちが、どこまで本人を中心に、心を一つに取り組むことができるか。

この取り組みの最前線にいる職員は、それぞれの取り組みを通して、あらためて本人を中心にした個別支援の大切さを実感しているところである。

津久井やまゆり園の再生に向けた取り組みは、開始したばかりである。まずは一人一人の望む生活を実現していくことで、その先の暮らしの場の選択が見えてくるのではないだろうか。そのためにも、これからも本人を中心に、取り巻く環境を更に築きながら、ていねいに支援を進めていくことが大切だと考えている。

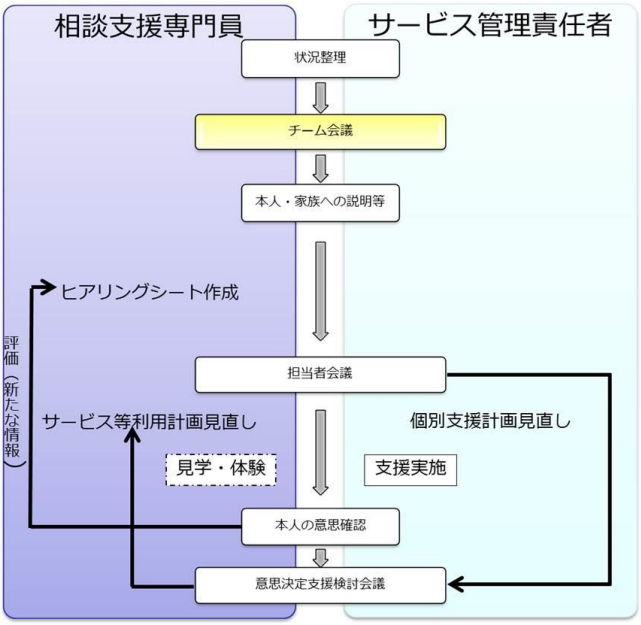
資料集

(1) 津久井やまゆり園基本構想とは？

事件によって命を奪われた利用者への鎮魂、ご遺族の痛惜の念、そして心身に傷を負った利用者及び職員の尊厳の回復を念頭に置き、利用者、ご家族、職員、津久井やまゆり園を支えていただいている地域住民の方々など関係するすべての人々、さらに、社会全体として、この事件を乗り越え、「ともに生きる社会かながわ憲章」の理念を真に実現することを目指して取りまとめた。

津久井やまゆり園再生基本構想より抜粋

(2) 意思決定支援の基本的な流れ①



(3) 意思決定支援の基本的な流れ②

導入期（Ⅰ期）	連携期（Ⅱ期）	検討期（Ⅲ期）	決定期（Ⅳ期）
居住の場ありきではなく、今の生活状況の確認や意思決定支援に必要な情報をアセスメントする。もし、家族から居住の場のことで相談があったら、要望等をしっかり話を聞いた上で、利用者が安心して生活できる場をじっくり考えていくことを説明する。必要に応じて、県職員も同席して説明する。	生活場面を決めていくため見学や体験を行っていきたいが、そのためには生活場面での意思決定支援が重要となる。導入期で作成したサ計画をサビ管に伝え、個別計画に反映させる（国ガイドラインの①はサビ管、②は相談支援専門員の役割であることが前提）	相談支援専門員による定期的なモニタリングの状況及び個別支援計画の実施状況の確認の他、支援上のアドバイスを行う。また、居住の場の説明次期や説明の仕方、最終的な居住の場の検討を行う。	検討会議での議論を踏まえ、最終的な居住の場を決定する。
セルフ⇒計画相談	担当者会議の実施	検討会議の実施	検討会議の実施
○担当者会議の実施（どのように面接を進めるか、かかわっていくか等を行政等と協議した上で介入する） 「セルフから計画相談の移行の説明について」 「計画相談の契約・インテーク・アセスメントの方法について」 「最近の状況について」	○サービス等利用計画を説明し、関係者及び家族に今後の支援についての共有を図る ○担当者会議の参加者（県、市町村、相談支援専門員、サービス管理責任者、本人、家族　等） ○相談支援専門員は事前にサビ管、行政と担当者会議に向けた打合せを行う 「生活の安定（相談）、豊かな生活（サビ管）に向けて支援を行っていく」 「入所施設では個別支援に力を入れ、具体的に○○を行うことを説明」	○サービス等利用計画及び個別支援計画の実施状況の確認 ○支援上の必要な助言 ○意思決定支援の展開の確認 ○居住の場を本人及び家族に説明する時期の検討 ○今までの支援、本人及び家族の状況を踏まえ、居住の場の選考を行う	○サービス等利用計画及び個別支援計画の実施状況の確認 ○今までの支援、本人及び家族の意向を踏まえ、居住の場の決定を行う
モニタリング			
○行政も含めた事業所内会議の実施（どのように面接を進めるか、かかわっていくか等を協議した上で介入する） 「最近の状況について」 「再アセスメントの方法について」			
チーム会議の実施		意思決定支援専門アドバイザー	

平成 30 年度　体験交流セミナー④

(4) 日中活動～外出やイベント、地域交流等

活動名	活動内容
ドライブ	横浜、山下公園、赤レンガ倉庫、みなとみらい、鎌倉、野毛山動物園など
陶芸レク	作品作り、気分転換
踊りレク	フラダンス体験
お楽しみ活動	映画鑑賞、カラオケなど
プール活動	
季節行事	お花見、新年会、七夕会、敬老会、クリスマス会
3大行事	①笑顔がキラリ☆　②夕涼み会　③まつりだ！！やまゆり (行事に向けて利用者様と一緒に看板作りやポップ作り、自主製品作り・製品の袋詰め等を行ないました。)
フリーマーケット	地域の方やボランティア様に衣類提供を呼び掛け、シーズン毎に青空フリーマーケットを開催しました。
余暇活動	ポップコーン作り、綿菓子作り、かき氷会、芋ほり、クッキング
地域コンサート	地域の方々や作業所の方々を招待し、交流を目的としたコンサートの実施。 K＆K、横浜管弦楽団、雨宮知子、虎次郎バンド
地域行事	ホースセラピー、六ッ川四丁目町内会夏祭り、芹が谷中学校運動会、学芸会、港南区野球少年大運動会
地域交流	上永谷駅周辺清掃、芹が谷中学校清掃交流、ボランティア様との落ち葉掃き、港南区コミュニティーフェスタ、楽打音発表会(和太鼓)、地域事業所の見学会、地域事業所交流会(苗の植え替え・カラオケ会)
祈りの日	毎月26日を「法人祈りの日」と定め、尊い命を奪われた19名の方々のご冥福をお祈りするために黙祷を捧げ、芹が谷園舎では祭壇を設置するなどの取り組み